

日本語接触場面におけるペルシア語話者の  
儀礼的な言語行動の管理

— 第三者視点による評価を参考に —

フーリエ・アキバリ

Ritual Linguistic Behavior of Persian Speakers  
in Japanese Contact Situations:  
Observations from a Third Person Point of  
View

Hourieh AKBARI

This paper focuses on the Persian speaking community in Japan, which is a community that has received little attention so far. This study examines how Persian native speakers manage their distinctive ritualistic acts and linguistic acts in contact situations when communicating with Japanese native speakers. The focus is placed on where and how frequently their Persian native norms are used for language generation and language management when they participate in Japanese conversations and in situations where the language is used. As far as methodology is concerned, five conversations in natural ritual situations which involved both Japanese and Persian speakers were analyzed from a third person point of view. Deviations from Persian native norm, particularly sociolinguistic norms, were extracted for analysis. As a result, it was found that during a ritual situation, deviations from Persian norms tend to occur in specific positions. This finding suggests that different base norms are emphasized according to the function of speech acts in ritual situations.

キーワード：ペルシア語母語話者、儀礼的な言語行動、日本語接触場面、第三者評価、社会言語規範

## 1. はじめに

近年グローバル化の拡がりとともに、多様な社会・文化・言語的背景を持つ外国人移住者や移民等とよばれる移動する人々が、世界中で多く見られるようになった。このような移動する人びとの言語使用は、社会言語学上の関心事の一つとなっている。日本においても多様な言語環境が発達しつつある。外国人移住者として、日本で生活する日本語非母語話者は、日々さまざまなコミュニケーション上の問題に直面しながらも、独自のコミュニケーションのスタイルやストラテジーを維持していると考えられる。従来の中における接触場面に関する研究は、近隣の諸国(中国や韓国)が対象であった。しかし、グローバル化する社会においては、言語・文化背景がまったく異なる人々との相互行為が接触場面と呼ばれる環境の中でとわれてくる。特に地理的に離れている国の人々の間では、互いの見慣れない習慣や文化的背景の理解がより困難になると考えられるため、そうした研究に焦点を当てることの重要性も大きいと言える。

イランは、昔から日本と親密な関係を保っており、イランと日本の間に査証相互免除協定が存在した1979年から1992年までの期間には、20万人に及ぶイラン人が日本に中・長期滞在にわたって滞在していた。彼らの多くは、日本で結婚し新しい生活を始めている。

本研究では、これまで取り上げられてこなかった、日本で中・長期滞在中のペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場면을対象に考察を行う。その中でも特に、両社会の文化で重視される儀礼的場面に焦点を当てて考察を行った。

ペルシア語母語話者は、母語場面での相互行為で浸透している独特な儀礼的言語行動をもっている。この言語行動ストラテジーは「ターロフ」(Taarof)と呼ばれ、特に相手に対し敬意を示したい場合など、様々な場面で表れる。そこで、本研究では接触場面においてもターロフ的な言語行動規範(母語規範)が表れるのかについて検討していきたい。そしてそこで、ペルシア語話者の母語規範として判断された箇所においては、どのような問題が報告されるのかを考察する。さらに、日本語規範(目標言語規範)からの逸脱は、どこで留意され、第三者によってどう評価されているのかを

検討する。

本調査では、接触場面におけるターロフ的な言語行動規範（ペルシア語母語規範）を言語管理の視点から考察することで、儀礼的な自然会話に生じる問題は何であるのか、どのような課題がそこにあるのかを明らかにする。

言語管理理論は、実際の接触場面の中での参加者が言語をどのように評価しているかを捉えるところから始めるべきであると述べられており（ネウストプニー、1997）、「接触場面アプローチ」を言語コミュニティ研究にも当てはめることができると考えられている。接触場面においては、単に生成的に実現される行動だけではなく、規範や期待からの逸脱から始まる管理的な諸過程が頻繁に行われていることは興味深い。したがって、本研究の分析結果は、日本在住のペルシア語母語話者の言語コミュニティの実態を明らかにすると考えられる。

## 2. 先行研究

### 2.1. ペルシア語母語話者とターロフ文化

儀礼とは、一定の形式ののつとった規律ある行為・礼法のことである。Tambiah (1985, p. 128) は、儀礼とは「文化的に体系化された象徴的コミュニケーション」（“a culturally constructed system of symbolic communication”）だと述べている。その際、特定の社会構造の中で生きる社会の構成員は、儀礼を通して社会的アイデンティティを確認、再確認する（Malinowski, 1922; Radcliffe-Brown, 1922）という。

そこで、日本社会も含め各社会において儀礼的な場面でのコミュニケーション行動があるように、イラン人社会においても儀礼的な場面、相手に対し敬意を示したい場面には、決められたコミュニケーション行動がある（アキバリ、2016）。その独特な言語行動・非言語行動をも含む社会的言語行動を「ターロフ」と呼ぶ。ターロフには様々な意味が含まれており、敬意、遠慮、儀礼、おもてなし、謙遜などの意味が一般的なものとして知られている（Sahragard, 2003）。

アメリカの社会学者である Beeman (1986) は、ターロフがイラン人の儀

礼的ストラテジーであることを明らかにし、ペルシア語には互いに礼儀を示す根本的な思想として二つの原則があると主張している。まず(1) Self-Lowering: 謙遜語や謙讓語のような行為を行う者を相対的に低め、その動作を受ける者(受け手)を高めること、次に(2) Other-raising: 相手を立て尊敬する行為であり、この二つの形はペルシア語の名詞や動詞にも影響し、変形を及ぼすことである。謙讓語名詞(呼称)、謙讓語動詞、尊敬語名詞、尊敬語動詞がそれぞれ儀礼的な場面で使われている。

## 2.2. 接触場面での言語管理

言語・文化背景が異なる人々による相互行為は、接触場面と呼ばれ、接触場面は母語話者同士の場面とは異なる独自の特徴を持っている(Neustupný, 1985a)。そこで、接触場面研究では、言語管理理論のアプローチから接触場面での言語の生成と管理に注目し、社会文化、社会言語そして言語上の問題に対する言語管理の解明を課題にしている。従来の研究では、様々な手法を用いて接触場面で見られる問題を考察する研究が行われてきた(ファン、1999; Fairbrother, 2009; 宮崎・マリオット共編、2003など)。また、接触場面での「言語問題」を言語管理のプロセスから解明する研究も数多く見られる(Fan, 1994; 村岡、2006; 高、2006など)。

言語管理の理論には、二つの特徴がある。まず一つ目はミクロプロセスの重視である。ネウストプニー(1995)は、言語管理の理論は「言語計画」との関連で生まれたことであり、その理論からするとすべての言語問題の基礎は談話のミクロプロセスにあるとしている。二つ目は、言語管理のプロセスには一定の普遍的な段階があることである。

以上で述べた段階を以下のようにまとめる。

- (1) 規範(Norm)からの逸脱(Deviation)
- (2) 逸脱への留意(Noting)
- (3) 留意された逸脱の肯定的/否定的な評価(Evaluation)
- (4) 評価された逸脱に対しての調整(Adjustment)計画と実施

本調査では、言語管理プロセスの(1)~(3)の部分を中心に分析していく。

### 3. 調査方法

#### 3.1. 調査の概要

データはフィールドワーク（佐藤、1992）で調査者がベルシア語母語話者と日本語母語話者が相互行為を行っている場面に行き、自然な会話を収集したものである。

調査期間は、2014年12月から2016年1月である。会話の収録方法は2通りで、一つは、調査者自身が実際にコミュニティーに入り、調査協力者とともに一定の時間を過ごし、そこで行われた会話を収集したものである。もう一つは、調査者は実際の場面におらず、会話を録音するためICレコーダーのみを調査協力者に渡し会話を録音したものである。今回は、収集された52のスピーチイベント（Hymes, 1972）のうち、五つのスピーチイベントに焦点をあて分析を行った。

本稿では、会話当事者（ベルシア語母語話者）の言語管理に注目し、ベルシア語母語話者の社会言語規範からの逸脱を取り上げる。まず、調査者による自然場面での逸脱への留意を「逸脱の基準」として考察した。次に、同じ会話を第三者に聞いてもらい、会話内で逸脱だと留意した箇所を指摘してもらった。その箇所を「逸脱の基準」と照合させ、分析を行った。まず自然会話のデータ収集後、宇佐美（2011）<sup>1)</sup>のトランスクリプト方式で文字化を行い、必要に応じて調査協力者に対してフォローアップ・インタビュー（ファン、2002）を実施した。

#### 3.2. 収録された自然場面のスピーチイベント

ここでは、儀礼的相互行為が観察された場面のスピーチイベントを取り上げた。スピーチイベントのようなイベントでの行為は、参加できるのは誰か、役割関係はどのようなものか、どのような種類の内容なら認められるか、どのような順番で情報が提示されるか、どのようなことばのエチケットが適用されるのかといったことを特定する社会的規範によって支配されているものと考えられる（ガンパーズ、1982）。以下に分析対象となった五つのスピーチイベントと参加者の関係と人数をあげた。

表1 分析対象の五つのスピーチイベント

番号	調査場面	スピーチイベント	参加者関係	参加者数
①	展示会	展示会での値段の交渉	店員(JP)-客(IR)	3人
②	家の玄関先	近所同士で開始と終了部挨拶・褒め・感謝が現れる	知り合い(JP-IR)	3人
③	フリーマーケット	開始部の挨拶	同じ場で同様の作業をする(JP-IR)	2人
④	研究室内	開始部挨拶と情報提供など	学生同士(IR-JP)	4人
⑤	大学内	開始部と終了部の挨拶・誘い	学生(IR)と大学のスタッフ(JP)	3人

### 3.3. 調査協力者

6名の調査協力者はすべて、日本中・長期滞在者(7年~25年)のイラン出身のペルシア語母語話者である。調査協力者の日本への来日目的により、彼らの日本語習得に対する需要や意識が異なっていることが明らかになった。

そこで本調査では、日本在住のペルシア語話者を言語習得の状況から大きく二つのグループに分類した。一つは、仕事を目的として来日した者とその家族(妻や子供)を自然習得者グループ(グループ(I))、そして、勉学を目的とした、留学生グループ(グループ(II))とに分け、調査・検討を行った。

両グループの共通点は、日本語母語話者と日常会話が問題なくできる日本語能力を習得していることが挙げられる。しかし、相違点として以下の2点が挙げられる。

- ① グループIの調査協力者は、日本語を自然習得し、日本の文化を自らの私生活の中で経験として学んだ者である。
- ② グループIIは、日本語や日本についての文化の背景は大学や日本語クラスで学習した者である。

日本語接触場面におけるペルシア語話者の儀礼的な言語行動の管理

表2 分析対象の6名の調査協力者の特徴

番号	調査協力者	年齢	性別	滞在歴	身分	日本語能力	日本語習得法
①	N-IR01	40代	男性	20年	介護	会話：上， 読書：中	自然習得
②	N-IR07	50代	女性	9年	主婦	会話：中， 読書：下	自然習得
③	E-IR02	30代	女性	10年	大学助手	会話：上， 読書：上	大学の日本語機関
④	E-IR03	20代	男性	12年	博士課程院生	会話：上， 読書：上	大学の日本語機関
⑤	E-IR04	20代	男性	12年	博士課程院生	会話：上， 読書：上	大学の日本語機関
⑥	E-IR06	20代	女性	8年	博士研究員	会話：上， 読書：上	大学の日本語機関

第三者による逸脱の留意の分析では、4名の日本語母語話者と2名のペルシア語母語話者、合計6名の協力を得た。対象としたペルシア語話者は、日本語を十分理解し、相互行為での会話の流れや、目標言語からの逸脱を評価できる者を対象とした。

表3 第三者日本語母語話者

日本語母語話者			
第三者評価協力者	性別	年齢	身分
JPE1	男	30代	社会人
JPE2	女	20代	学部生
JPE3	男	20代	学部生
JPE4	女	20代	学部生

表4 第三者ペルシア語母語話者

ペルシア語母語話者				
第三者評価協力者	性別	年齢	身分	日本語習得グループ
PRE1	男	20代	社会人	グループI
PRE2	男	50代	社会人	グループII

#### 4. 分析の枠組み

分析には、言語管理理論 (Neustupný, 1994) の枠組みを用いることにする。

それぞれのコミュニティの参加者には、一定の規範が存在する。しかし、あるコミュニティの参加者が新たなコミュニティでインターアクションをする際には、「逸脱」を起こしかねない。

##### 4.1. 社会言語的な逸脱の分類

本稿では、儀礼的相互行為の分析をするために、Hymes (1972) の SPEAKING モデルを応用したネウストプニー (1982) の分類、「社会言語規範」からの逸脱の留意に焦点を当てる。この分類では、コミュニケーションをいつ始めるか(点火のルール)、いつどこでコミュニケーションを行うか(セッティングのルール)、標準語で話すか方言で話すか、あるいは丁寧体を使うか普通体を使うか(バラエティーのルール)、どんな媒体を使ってコミュニケーションをするのか(媒体のルール)、そしてどのような内容のコミュニケーションをするのか(内容のルール)などがある。ここではネウストプニーの分類を基に、大きく五つの視点から、ペルシア語話者の接触場面での逸脱<sup>2)</sup>を考察する。これらは、儀礼的なインターアクションを成り立たせる上で会話の参加者が談話内で重要視しなければならないものである。それぞれの視点は(1)話題関係での逸脱、(2)隣接ペア・発話の連鎖からの逸脱、(3)対人関係での逸脱、(4)話順交替の留意への逸脱、(5)その他と分類できる。本調査では、調査者が逸脱を判定する基準として、以上の五つを採用する。それぞれの視点における各逸脱の詳細を以下で紹介する。

- (1) 話題関係での逸脱: 発話者同士の談話内での話題の内容が逸脱として注目される。

##### (1-A) 非適切な箇所での話題導入:

ある話題や表現が談話内の不適切な箇所で現れた場合。あるいは、なんの前置きもなく新話題に入る場合。例えば、不適切と判断され



る箇所で「依頼」や「褒め」が留意された場合。

(1-B) 多様な話題の導入 (内容のルール):

話題を多く導入することで話の内容にずれが生じる。

- (2) 隣接ペア (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)・発話の連鎖からの逸脱:

(2-A) 未完成な隣接ペア:

第1成分が発話されるものの、相手の発話者により第2成分が完成しない。

(2-B) 非優先的な応答:

第1成分と第2成分の間に、間、笑い、フィラー、などが留意され、会話全体のテンポが乱れていると判断された場合。ここでは、隣接ペアは完成するものの、不適切な応答から連鎖が継続しない。

(2-C) 発話連鎖の中断:

期待される箇所において発話連鎖が続かない。

- (3) 対人関係での逸脱: 相互行為において、相手の発話者との関係性に関連する言語行動、社会的立場・社会的関係の認識に関わる逸脱により、言語調整に変化が表れる。

(3-A) 上下関係を留意しない会話進行:

相手の発話者との距離感を縮める言語調整を優先する。

(3-B) スピーチレベルでの逸脱:

相手の発話者との社会関係を留意せず、普通体や敬体を使用する。

(バラエティーのルールと参加者のルール)

- (4) 話順交替の逸脱の留意:

(4-A) ターンを長く持ち続けることで、非儀礼的な態度として評価される。

(4-B) 話題開始に見られる逸脱 (セッティングのルールと点火のルール)

- (5) その他: 談話内のミクロな視点からのみではなく、マクロな視点からの逸脱が留意される場合。
- (5-A) 相互行為での会話全体に対する印象(笑が多い、声の張り具合など)
- (5-B) 非言語的な行動など

ペルシア語話者による逸脱が以上の項目または内容と関連するものであれば、談話内で社会言語規範からなんらかの逸脱が生じたものとみなす。

#### 4.2. 第三者による逸脱の認定と評価による規範の同定

第三者による逸脱の認定そしてその評価を述べてもらう手法は、調査者の客観的な逸脱に対する判断を補うために行われた。加えて、会話内での規範を同定するためのデータとして、第三者の評価を取り入れた。第三者は、逸脱を留意した際に、自己の中で基底規範(Neustupný, 1985a)を持っており、そこから逸脱を判断していると考えられる。そこでペルシア語母語話者と、日本語母語話者のそれぞれの基底規範から見られる評価を参考に、接触場面での相互行為における参加者の基底規範を示したい。接触場面の参加者はその場面で適用される基底規範を新たに構築したり、内的場面ではおきかないような問題を解決しなければならなかったりと、様々な面で母語話者だけから構成される内的場面とは異なる言語行動をとっていかなければならない(Neustupný, 1985b)。

第三者による逸脱の認定から、会話参加者のペルシア語母語話者側の視点からの規範は、自国の母語規範、目標言語規範(日本語接触場面では日本語規範が目標言語規範である)、接触場面規範(接触場面でのみ作られた規範)、中間言語規範(目標言語規範の中間言語的な規範)(加藤, 2006)が挙げられた。

## 5. 分析結果

## 5.1. 第三者による逸脱への留意と「逸脱判定基準」との照合

ここでは、第三者による逸脱への気づきと、調査者自身が、会話分析を通して「逸脱の判定基準」とした箇所を照合していきたい。まず第三者に、談話内において「気になった箇所」「分かりづらい、理解しにくい」と留意したところを指摘してもらった。そして、それぞれの逸脱を4.1節で示した調査者による逸脱判定の五つの基準に照合し、分類を行った。以下の表5は第三者によって留意された逸脱とそれを逸脱判定基準による分類した結果を示したものである。

表5 第三者による逸脱の詳細の箇所と数

逸脱種類	逸脱の詳細（コメントを参考に）	逸脱への留意	総計
話題関係での逸脱	① 話題の前置きがなく命題に入る	7	18
	② 会話の終了部での挨拶	5	
	③ 「誘い」が軽く、本気でない、冗談に聞こえる	4	
	④ ベルシア語話者からの話題展開が多い	2	
隣接・発話の連鎖からの逸脱	① 日本人の情報提供に関しての不適切な応答（『あ〜』や『すごい』）	3	11
	② 笑いが多く、不自然に捉えられる	3	
	③ 第1成分と第2成分のあいだに間が見られる	2	
	④ 日本人の応答が微妙に冷たい	2	
	⑤ 第2成分で期待の応答が見られない	1	
対人関係での逸脱	① 日本語規範の上下関係が留意されていない（不適切な表現の使用）	9	17
	② 文末の丁寧体動詞の省略	5	
	③ 年上である日本人の名前にベルシア語の接尾辞を使用	2	
	④ 談話内でスピーチレベルシフトが多く見られた	1	

話順交替への留意	① ペルシア語発話者が一方的に会話を進める⇒ターン交替ない	4	7
	② 日本人が聞き手になり、ペルシア語話者が話し手	3	
その他	① 談話の流れをペルシア語規範で促進している	3	10
	② ペルシア語話者の感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい	2	
	③ ペルシア語話者がなれなれしく会話する	2	
	④ ペルシア語話者が日本人の会話のテンポに合わせてとてもいい	1	
	⑤ 声を張りすぎている(儀礼的な興味表示マーカ)	2	

表5から、話題関係と対人関係からの逸脱が順番に最も多く留意されていることが分かる。その中でも最も多く報告されたのは、対人関係の「日本語規範の上下関係からの逸脱」で、次に「話題の前置きがなく突然命題に入る(前置きがなく話題を変える)」であった。また、「文末の丁寧体動詞の省略」や「会話の終了部での挨拶」なども逸脱としての指摘がみられる。

逸脱判定基準および第三者の言語背景との関係から、以上の第三者によって留意された逸脱を見ると大きく四つのタイプに分類することができる。

逸脱1: 日本語話者のみによって留意された逸脱

逸脱2: ペルシア語話者のみによって留意された逸脱

逸脱3: 日本語話者とペルシア語話者の両者によって留意された逸脱

逸脱4: 逸脱の判定基準にはあるものの第三者には留意されていない逸脱

以上の逸脱1から3のグループは、第三者が逸脱の判定基準で述べた項目と一致した箇所でも逸脱を留意したところであり、逸脱4は調査者による判定基準でのみ抽出された逸脱である。

それぞれのグループで逸脱が留意された件数は以下のようになる。

表6 タイプ別に見られた逸脱の種類と数

第三者と調査者の 逸脱の照合から	逸脱判定基準					計
	話題関係	隣接ペア の連鎖	対人関係	話順交替 への留意	その他	
(a) 逸脱1タイプ	8	5	7	3	6	29
(b) 逸脱2タイプ	3	2	4	1	3	13
(c) 逸脱3タイプ	5	3	5	3	1	17
(d) 逸脱4タイプ	2	1	1	0	0	4
	18	11	17	7	10	

表6でわかるように、日本語母語話者のみに留意された逸脱(逸脱1)は、ペルシア語話者によって留意された逸脱(逸脱2)より2倍以上報告されている。判定基準でのみ抽出された逸脱(逸脱4)は4件と少なく、調査者による判定基準と第三者が留意した逸脱の大部分は一致することが明らかになった。一方、そのほかの逸脱のタイプについては、第三者の2グループ間で共通して留意を報告した場合(逸脱3)がある一方で、留意にかなりの異同のある場合(逸脱1と逸脱2)も少なくなかったことがわかる。次節では、第三者評価の二つのグループがどのような規範をもとに逸脱を留意していたかを分析する。

## 5.2. 第三者による逸脱の評価と規範

これまで逸脱がどの箇所でも留意されたのかを分析を通して検討した。ここでは、日本語母語話者とペルシア語母語話者がそれぞれの逸脱をどのように評価したのか、またそれぞれが逸脱として判断した規範が何であったのかを見ていきたい。表7は、それぞれの逸脱の箇所と逸脱の評価基準としてみた規範を示したものである。日本語の規範のみを知っている日本語母語話者は、日本語の規範からの逸脱を留意し、評価している。そして、両規範を知っているペルシア語話者は、日本語とペルシア語の両方の規範から逸脱の留意、また評価をしている。つまり、収集されたスピーチベ

ントに対して第三者の日本語母語話者、ペルシア語母語話者は、一方では共通の規範から逸脱を留意し、他方ではそれぞれ別の規範をもとに逸脱を留意していたと考えることができるだろう。

表7 第三者による逸脱への評価と適用された規範

逸脱種類	逸脱の詳細	日本語母語話者			ペルシア語母語話者		
		留意	規範	評価	留意	規範	評価
話題関係での逸脱	① 話題の前置きがなく命題に入る	○	日本語規範	否定的	○	日本語／ペルシア語規範	否定的
	② 会話の終了部での挨拶	○	日本語規範	否定的	○	日本語／ペルシア語規範	否定的
	③ 「誘い」が軽く、本気でない、冗談に聞こえる	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	④ ペルシア語話者から話題展開が多い	○	日本語規範	否定的	×	—	—
隣接・発話の連鎖からの逸脱	① 日本人の情報提供に関しての不適切な応答(『あ〜』や『すごい』)	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	② 笑いが多く、不自然に捉えられる	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	③ 第1成分と第2成分のあいだに間が見られる	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	④ 日本人の応答が微妙に冷たい	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的
	⑤ 第2成分で期待の応答がない	○	日本語規範	否定的	○	日本語／ペルシア語規範	否定的

日本語接触場面におけるペルシア語話者の儀礼的な言語行動の管理

対人関係での逸脱	① 日本語規範の上下関係が留意されていない(不適切な表現の使用)	○	日本語規範	否定的	○	日本語規範	否定的
	② 文末の丁寧体動詞の省略	○	日本語規範	否定的	○	日本語／ペルシア語規範	否定的 —肯定的
	③ 年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的 —肯定的
	④ 談話内でスピーチレベルシフトが多く見られた	○	日本語規範	否定的	×	—	—
話順交替への留意	① イラン人発話者が一方的に会話を進める⇒ターン交替なし	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	② 日本人が聞き手になり、ペルシア語話者が話し手	○	日本語規範	否定的	×	—	—
その他	① 談話の流れをペルシア語規範で促進している	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的 —肯定的
	② ペルシア語話者の感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的 —肯定的
	③ ペルシア語話者の会話が馴れ馴れしい	○	日本語規範	否定的	×	—	—

その他	④ ペルシア語話者が日本人の会話のテンポに合わせており、とてもいい	×	—	—	○	ペルシア語規範	肯定的
	⑤ 声を張りすぎている(儀礼的な興味表示マーカー)	○	日本語規範	否定的	○	ペルシア語規範	肯定的

ここで、日本語母語話者のみが留意した箇所に関しては、ペルシア語母語話者が母語の影響を受けやすいあるいは接触場面でよく逸脱をしがちであると考えられる箇所になる。なぜならば、相互行為の会話参加者と第三者として会話を評価したペルシア語母語話者がそれらの箇所に対し、儀礼的な逸脱として留意していなかったからである。

### 5.2.1 日本語母語話者のみによる逸脱1の評価

日本語母語話者が留意した逸脱(逸脱1)での評価は、すべて否定的であった。具体的には話題関係「③ 誘いが軽く、本気でない、冗談に聞こえる」、④ ペルシア語話者から話題展開が多い」、隣接ペア連鎖「① 日本人の情報提供に関する不適切な応答」、② 笑いが多く不自然に捉えられる」、③ 第1成分と第2成分のあいだに間が見られる」、対人関係「④ 談話内でスピーチレベルシフトが多く見られた」、話順交替「① イラン人発話者が一方的に会話を進める」、② 日本人が聞き手になり、ペルシア語話者が話し手」、その他「③ ペルシア語話者の会話が馴れ馴れしい」といった逸脱に対して日本語母語話者のみが留意し、否定的に評価している。

(例1) 場面: 研究室での会話、

参加者: 学生(3名・ペルシア語話者も含む)と先輩(1名)

【逸脱の種類】: 日本人の情報提供に対する不適切な応答(隣接ペア連鎖から)



【評価】：否定的                      【判断規範】：日本語規範

ライン 番号 (L)	協力者	会話内容	発話機能
69	N-IR06	【問】 皆さん、どこか行かれるんですか？。	質問
70	N-JP01 <sup>3)</sup>	【少し間】 私は、 <u>実家に帰って、家族と一緒にいます。</u> 応答	
71	N-IR06	<u>おーう、すごい、実家一番だよ</u> ね〈笑〉。褒め〔感情提示〕	
72	N-IR06	実家帰りた <sup>い</sup> ね。	
73	N-JP01	帰らないの？。	
74	N-IR06	本当、短いから、お正月の休みは、外国は行けないね。	

第三者評価の日本語母語話者が最も否定的に評価していたのは、「①日本人の情報提供に対する不適切な応答」であった。例1では、N-IR06が会話で少しの間が見られた時に、話題提供を開始している。質問に対して、N-JP01が応答したものの、L71でペルシア語話者が、『おーう、すごい、実家一番だよ ね 〈笑〉。』と返答する。そこでは、隣接ペアが成り立っているものの、日本語母語話者からは、否定的に評価されている。「どうして、家族旅行が『すごい』となるのか」、「日本人は、『いいね』などと答える」、「大変なことをしているわけではない」というコメントが見られた。従ってN-IR06は、ペルシア語の規範から、応答では、「相手に興味を表示する」または「感情を会話の中で示す」ための発話をするものの、このような応答は日本語母語話者には肯定的に評価されないようである。

## 5.2.2. ペルシア語母語話者のみによって留意された逸脱2の評価

### (1) 肯定的評価

ペルシア語母語話者のみによって逸脱(逸脱2)が留意され、なおかつ肯定的に評価されたものは、対人関係の「③年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用」またその他の「①談話の流れをペルシア語規範で促進」、「②ペルシア語母語話者による感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい」、「③ペルシア語話者が日本人の会話のテンポにあわせている」であった。コメントの内容から、肯定的に評価されたものは、ペル

シア語の儀礼に関する規範が評価の基底規範になっていることが分かる。

(例2) 場面: 近所での挨拶、参加者: 日本語話者60代、ペルシア語話者40代(近所の知り合い)

【逸脱の種類】: 談話の流れをペルシア語規範で促進している

【評価】: 肯定的      【判断規範】: ペルシア語規範

103	N-JP02	あら、そう、 <u>良かったね。</u>	褒め
104	N-JP02	いいとこ、 <u>見つかってね。</u>	褒め
105	N-IR07	はい、 <u>本当に。</u>	応答
106	N-IR07	<u>遊びに来て下さい。</u>	誘い
107	N-JP02	<u>〈笑〉【間】。</u>	×
108	N-IR01	<u>はい、ありがとうございます。</u>	感謝
109	N-IR07	<u>いつも、ありがとうございます。</u>	感謝

例2では、第三者のペルシア語母語話者がN-IR07の「誘い」や「感謝」の発話機能の表出が日本語規範に沿っていないことを留意したが、「これらが会話で見られことで、相手に対して感情を示している」、「会話の流れを聞いていて気持ちがいい」などの肯定的評価があった。ペルシア語の儀礼的な社会言語規範(ターロフ)では、「相手の発話者を自分の領域に誘う」または「自分の感情を示す発話連鎖」が礼儀として見なされていることが、上記の第三者のコメントから理解される。L106、L107では隣接ペアが未完成であったり笑いや間が見られ、また応答がある場合、それが非優先的な応答と考えられ、相手の発話者N-JP02によってなされている。しかし、N-IR07は感情提示や相手に興味を示すことで、より親密な人間関係を作ることを会話内において重視していると考えられる。

(例3) 場面: 研究室での会話、参加者: 学生(3名)と先輩(1名)

例3では、ペルシア語母語話者が突然日本語話者にアドバイス(警告)をしている場面である。警告をしている相手の日本語話者(E-JP01)は、ペルシア語話者(E-IR06)の先輩である。

【逸脱の種類】： 談話の流れをペルシア語規範で促進している

【評価】： 肯定的      【判断規範】： ペルシア語規範

- 44 E-IR06 そうそうそうそう。
- 45 E-IR06 だから、金曜日も、昨日も、一昨日も来てなくて〈うん〉そう、休んだ。
- 46 E-IR06 でも、ちょっとやだ、なんかヤバイ、いろいろ研究のこととか残ってて。
- 47 E-IR06 すっごい、すっごいできなくて。
- 48 E-JP01 ね、でも、出てこれて良かった。
- 49 E-IR06 うんなね、はい、皆ちゃんと気をつけて下さいね。 警告
- 50 E-JP01 【間】うん、はい。 応答

ここでは、E-IR06による上下関係の意識に対する逸脱が見られる。研究室には助手や先輩がいたにも関わらず「ちゃんと気をつけてくださいね」などと相手に対してのペルシア語母語話者の興味表示マーカ<sup>3)</sup>を示していることが肯定的に評価された。また、L50では、先輩であるE-JP01の応答に「間」やうなずきが確認される。この「間」やうなずきは、ペルシア語母語話者からすると、期待していた応答とは異なることから、日本語母語話者が冷たく認識されてしまうようだ。そしてそれは、非儀礼的な応答だと判断される。

## (2) 否定的評価

ペルシア語母語話者のみに、否定的に評価された逸脱(逸脱2)には、隣接ペア連鎖の「③日本人の応答が微妙に冷たい」が挙げられる。日本人による応答が冷たい、いわゆる期待している応答が日本語話者から返ってこないことが、相互行為で、発話連鎖が継続しない理由として挙げられている。また逸脱2の肯定的な評価でも挙げられた、対人関係の「③年上であるのに日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用」、その他の「①談話の流れをペルシア語規範で促進している」、「②ペルシア語母語話者の感情提示が談話の中で留意され、聞いていて気持ちいい」は、ペルシア語母語

話者が日本語規範を基定規範として考えた際には否定的に評価された。

(例4) 場面: 近所での挨拶、参加者: 日本語話者60代、ペルシア語話者40代(近所同士)

【逸脱の種類】: 年上の日本人の名前にペルシア語尾の接尾辞を使用(対人関係から)

【評価】: 否定的      【判断規範】: ペルシア語規範と日本語規範

- |   |        |                               |         |
|---|--------|-------------------------------|---------|
| 1 | N-IR07 | ごめんくださーい、 <u>〈N-JP02〉ジャン。</u> | 配慮表現    |
| 2 | N-IR07 | あ〜こんにちは〜、おはようございます、私《笑》。      | 挨拶      |
| 3 | N-JP02 | こんにちは。                        | 挨拶      |
| 4 | N-IR01 | おはようございます、どうも。                | 挨拶      |
| 5 | N-IR07 | 友達。                           | 友人の自己紹介 |

ここでは、会話開始部の挨拶で逸脱の留意が報告されている。相手の発話者であるN-JP02がN-IR07より年上であるにも関わらず、ペルシア語の「ジャン」という呼称表現をN-JP02の名前の語尾に付けていることが分かる。まず「ちゃん」の代わりに「ジャン」と誤ってペルシア語にコードスイッチングをしていることに加え、そもそも日本語の社会言語規範を基準としては、自分より年上に「ちゃん」という呼称で名乗らないことが指摘されている。

### 5.2.3. 日本語母語話者とペルシア語母語話者の両者によって留意された逸脱3の評価

(1) 逸脱に対する同様の評価(両者が否定的あるいは肯定的に判断している)

ここでは、話題関係「①話題の前置きがなく命題に入る」、「②会話の終了部でのあいさつ」、隣接ペア関係「⑤第2成分で期待の応答がない」、対人関係「①日本語規範の上下関係が留意されていない」が逸脱として留意されている。そして、いずれもの評価が否定的であった。否定的に評価された理由としては、日本語の社会言語規範が評価の基準となっていたこと

が、コメントから明らかになっている。

(例 5) 場面: 事務での終了部挨拶、参加者: 大学スタッフ 40 代、ペルシア語話者 20 代

【逸脱の種類】: 会話の終了部での挨拶 (話題関係から)

【評価】: 否定的      【判断規範】: ペルシア語規範と日本語規範

- 136 E-JP02            うん〈はい〉{<},,
- 137 E-IR03    〈じゃ、仕事〉{>} 頑張ってください。            終了部の挨拶
- 138 E-JP02    う〜うん、どうも、頑張りたくないけど〈笑〉。            応答
- 139 E-IR03    〈笑〉。
- 140 E-JP02    はいはいはい。
- 141 E-IR03    じゃ、失礼します。            終了部の挨拶
- 142 E-JP02    はい。            挨拶

例 5 では、学生である E-IR03 が大学のスタッフの E-JP02 に会話の終了部の挨拶をしている。この会話ですべての第三者に留意されたのは、L137 の『〈じゃ、仕事〉{>} 頑張ってください』の箇所である。「なぜこのタイミングでいきなりこの話題を導入しているのか」、「いたわる者を目上にしてはいけない (ライン番号 137)」などのコメントが両者から述べられ、否定的に評価された。また、L138 の E-IR03 の発話に対して E-JP02 が、笑いながら応答していることに関しては、「最後はちょっと笑いがあり不自然に思えた」などの評価も述べられている。ここでの笑いも非優先的な応答であると判断できる。このような日本語母語話者の応答は、ペルシア語母語話者が隣接ペアの第一成分で逸脱をしているからだと考えられる。

(例 6) 場面: 近所での挨拶、参加者: 日本語話者 60 代、ペルシア語話者 40 代 (近所同士)

【逸脱の種類】: 会話の終了部での挨拶 (話題関係から)

【評価】: 否定的      【判断規範】: ペルシア語規範と日本語規範

- 72 N-JP02    うん、元気だよ。

- 73 N-IR07 あ～、〈X〉ジャン?。 安否の挨拶  
 74 N-IR07 〈Y〉ジャン?。 安否の挨拶  
 75 N-JP02 うん、大きくなってね、また重くなった。 応答  
 76 N-IR07 あ～。

例6は、応答が不適切として留意された。例6の談話では、いくつもの逸脱が報告されているが、ここではペルシア語母語話者の『あ～』に注目する。L73とL74では、N-IR07が相手の発話者(「N-JP02」)の娘である〈X〉と〈Y〉の健康を尋ねている。この安否の挨拶の発話は、儀礼的な行動の開始として判断できるが、その後の『あ～』は儀礼行動として第三者どちらからも評価されず、最終的には総合的に非儀礼的応答として否定的に判断されている。L76でも同様なことが見られる。

## (2) 逸脱に対する異なる評価

ここでは、話題関係では「①前置きがなく命題に入る」と「②会話終了部での挨拶」での逸脱が、両者によって否定的に評価されていた。しかし対人関係からの逸脱での「②文末の丁寧体動詞の省略」では、日本語話者には否定的に評価されているものの、一部ペルシア語話者には、肯定的に評価されている。

(例7) 場面: フリーマーケットでの会話、

参加者: ブースを隣同士に持つ販売者(初対面での会話)

【逸脱の種類】: 文末の丁寧体動詞の省略(対人関係から)

【評価】: 日本語母語話者: 否定的、ペルシア語母語話者: 肯定的

【判断規範】: 日本語母語話者: 日本語規範、ペルシア語母語話者: ペルシア語規範

- 32 E-JP03 結構日本長いんですか? ぺらぺらですね。 質問—褒め  
 33 E-IR02 私、10年。 応答  
 34 E-JP03 10年、えーはーはー。  
 35 E-JP04 上手、上手。 褒め

## 〈日本語母語話者による評価〉

日本語話者はマクロな視点から E-IR02 の会話の全体の流れを評価している。「ペルシア語話者は話を盛り上げない」、「初対面であるのに、会話がなれなれしく感じられる。」、「会話に変な親しさ感がある。」と総合的に評価を述べている。

一方、ミクロな視点からの留意では、会話のいくつかの箇所において、L33 のように文末に動詞が現れないことが挙げられた。初対面であるにもかかわらず、動詞の省略が関係性を馴れ馴れしく見せていることが否定的な評価として報告されていた。

## 〈ペルシア語母語話者による評価〉

ペルシア語話者は、この場面においては、発話者同士の間では、上下関係もなく、「文末の動詞省略が関係性をより親しくしている」とその逸脱を肯定的評価していた。同じく、「③会話中に声を張る」も儀礼的なマーカーとして肯定的に評価されていた。これらの場合ではいずれも、ペルシア語の社会言語的規範を評価の基準としていると考えられる。

次節では以上の評価の内容を参照に、会話の参加者によって適用されている規範について考察していきたい。

## 5.3. 第三者の評価から想定されるペルシア語話者の規範適用

以下は、第三者の逸脱の留意の評価とそのコメントから、接触場面でペルシア語話者によって適用されたと考えられる規範をまとめたものである。

## (1) 母語規範

日本語母語話者が否定的な評価をしており、ペルシア語母語話者が肯定的な評価をしている逸脱では、ペルシア語からの転移 (= ターロフ) が現れていると考えられ、インターアクションに参加しているペルシア語母語話者は母語規範を適用したものと考えることができる。

以下の五つのタイプの逸脱がそれにあたる。

- ① 前置きがなく話題展開(相手の発話者を考慮した上での「アドバイス」、「健康尋ね」)
- ② 「感情提示」の現れ
- ③ 相手の発話者の「褒め」に対する「誘い」での応答
- ④ 会話終了の前置きでの挨拶
- ⑤ 声を張る(非言語的調整)

相互行為において、この五つのタイプの逸脱の共通した特徴は、ペルシア語母語話者が相手の発話者をより気遣ったことで発話されるということである。なぜならば、会話全体の流れを通して、以上の五つの言語行動が省略されても、相互行為の会話内容には何の乱れも表れないからである。従って、日本語母語話者には、以上の言語行動は不要に見え、否定的に評価される。一方で、ペルシア語母語話者にとっては、相手に対する興味を表示することは、儀礼的な象徴の表れであると述べられており、肯定的に評価されている。そのため、ペルシア語母語話者の言語使用からは、儀礼(的行為)としての「感情提示」や「誘い」などの発話が多く観察される。よって、接触場面においてもこのようなペルシア語の儀礼的な言語行動がそのまま表れるのではないかと考えられる。

## (2) 目標言語規範

儀礼的な発話行為としてみなせる言語行動が表れるが、第三者のいずれからも逸脱として報告されない場合には、目標言語である日本語の規範が適用されていると考えられる。その場合、逸脱があったとしても、逸脱は留意されないか、留意されても評価されず、報告には至らなかったと考えることができる。

目標言語規範が適用されたと考えられる逸脱のタイプには以下のようなものが見られた。

- ①「感謝」の発話機能、②開始部と終了部の「挨拶」、③「情報提供」の提示

以上の三つのタイプの発話機能を考察すると、ペルシア語母語話者は日本語の決まった定形表現を適切な箇所で使用していることが分かる。ま



た、「感謝」や「挨拶」を適用する箇所がペルシア語の母語規範と近いこともまた、ペルシア語母語話者が目標言語である、日本語母語規範を上手く習得できている一つの理由であると考えられる。

### (3) 中間社会言語規範

ペルシア語、日本語の両言語の規範からの逸脱として否定的に評価されたものである。そもそもペルシア語話者は、母語の社会文化的な影響から、発話場面に対して高い儀礼的意識を持っている。従って、相互行為では、儀礼的な発話を開始するが、日本の社会言語規範に対する不十分な理解から、日本語話者の応答に対してペルシア語規範と日本語規範の両言語から少し離れた言語行動をしてしまう。こうした逸脱は、中間的な社会言語規範にもとづくものと考えられ、以下の6つのタイプが観察された。

- ① 不適切な応答、② 相手との上下関係・社会関係への留意、
- ③ 文末動詞の省略、④ 必要以上の笑い、⑤ 相手への率直な質問
- ⑥ 相手の名前を呼ぶ、呼称など

以上の逸脱のタイプは、相手の発話者との距離間の認識に問題があることから現れたものと考えられる。特に初対面場面において、中間社会言語規範が多く見られた。日本語規範では、上司や初対面である相手に対し、より丁寧な言葉遣いや距離間の調整が期待される。また、ペルシア語規範では、このような言語行動をする場合、その前後に儀礼的な調整行動(=ターロフ)が入る。それに加え、必要以上の笑いも、相手に失礼であることが両言語話者から報告された。

### (4) 接触言語規範

第三者の双方から逸脱が留意され、かつ否定的に評価されたものである。儀礼的な接触場面では、一つの逸脱のみ日本語規範とペルシア語規範のどちらもベースになっていない、接触場面に特有の規範が適用されているものが報告された。

- ① ターンを相手に渡さない

この逸脱ではペルシア語母語話者が一方的に会話を進行させている。こ

のタイプの逸脱は、いくつかの場面で異なったペルシア語発話者から見られた。ペルシア語、日本語いずれの言語を使用した場面においても、このような儀礼的な言語行動はまったく存在しない。しかし、日本語母語話者との接触場面では、ターンを相手に渡さず、ペルシア語母語話者が一方的に話題を提供する場面が見られた。また日本語母語話者からの応答を意識せず、自分の意見や意思を述べていた。

ここで、(3)と(4)の大きな相違として(3)はどちらかの言語の儀礼的行動としての規範に少し関連する行動が存在しているものの、(4)では両言語の儀礼的言語行動規範には全く存在していないものになる。

以上の分析から、接触場面においてもペルシア語母語話者はターロフ的な言語行動をしていることが明らかとされた。またペルシア語の母語規範が適用され、逸脱として留意された箇所について、日本語母語話者がどのような評価をしているのか、実際どのような相互行為が起きているのかも明らかにできた。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本在住のペルシア語母語話者が儀礼的な会話場面において、日本語母語話者とのように言語行動を調整しているのかを言語管理の視点を取り入れ考察した。そして、ペルシア語話者が重視する儀礼的場面での規範に注目し記述した。

分析の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 第三者による逸脱のレベルとタイプでは、逸脱1と逸脱3のタイプが最も多く見られた。逸脱の3では、ペルシア語母語話者と日本語母語話者が共に同じ箇所を報告している。しかし、第三者が逸脱を留意した理由、すなわち逸脱の基準になると考えた規範が異なっていたことが明らかとなった。
- (2) 日本人の第三者によるペルシア語話者の逸脱の評価はすべて否定的であった。そうした逸脱が多く留意された場面の録音データでは、ペルシア語母語話者から誤った質問や応答が特に多く見られた。期待の応答でない発話が見られた箇所に関しては、笑いや間が

## 日本語接触場面におけるペルシア語話者の儀礼的な言語行動の管理

多く表れ、そこからの2~3ターンでは会話の乱れが見られる。

- (3) 儀礼的な言語行動に見られた発話機能のうち、「褒め」「誘い」「願望」「警告」ではターロフの影響が現れている一方で、「挨拶」や「感謝」では日本語の規範に近い行動が見られた。母語規範の影響は発話機能によって異なることが示唆された。
- (4) 二つのグループ（自然習得者グループと留学生グループ）ともに実際の場面では社会言語規範からの逸脱が見られた。

今後の課題として、より多くの発話場면을考察することで新たな視点を導入していきたい。また、言語習得の環境が重視される基底規範にどれほど影響を及ぼすのか、長期滞在でないペルシア語話者はどのような言語管理をしているのかなどをさらに考えていきたい。

### 注

- 1) 宇佐美まゆみ(2011)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTJSJ) 2011年版」
- 2) 言語管理における逸脱の認定は本来インタラクシオンの参加者が行うものなので、ここで述べられている「逸脱」は「筆者によって認定された逸脱」である。
- 3) 自然会話でペルシア語母語話者の相手の発話者である日本語母語話者は、本調査の分析の対象者でないことから、調査協力者のリストには挙げていない。
- 4) 逸脱として留意された箇所を下線で示す。(IR(ペルシア語話者)の発話は実線、JP(日本語話者)の発話は点線)
- 5) ペルシア語の儀礼的な言語行動として、相手の発話者に興味を示すことが述べられる。

### 参考文献

- アキバリ、フリーエ(2016)「ペルシア語母語話者同士の儀礼場面における談話管理：ターロフ場面を中心に」『千葉大学人文社会科学研究』32号、138-158頁
- 加藤好崇(2006)「接触場面における文体・話題の社会言語規範」『東海大学留学生教育センター紀要』26号、1-17頁
- ガンバーズ、J.(井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳)(1982)『認知と相互行為の社会言語学：ディスコース・ストラテジー』松柏社
- 高民定(2006)「文法能力の規範についての一考察：接触場面の受身の生成を中心に」『多文化共生社会における言語管理：接触場面の言語管理研究 vol. 4』千葉大

- 学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書129集、91-102頁
- 佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク』新曜社
- ネウストプニー、J. V. (1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- ネウストプニー、J. V. (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7号、67-82頁
- ファン、サウクエン(1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2号、37-48頁
- ファン、サウクエン(2002)「対象者の内省を調査する(1)フォローアップ・インタビュー」J. V. ネウストプニー・宮崎里司共編『言語研究のための方法』くろしお出版 88-95頁
- 宮崎里司・H. マリオット(編)(2003)『接触場面と日本語教育: ネウストプニーのインパクト』明治書院
- 村岡英裕(2006)「接触場面における問題の種類」『多文化共生社会における言語管理: 接触場面の言語管理研究 vol. 4』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第129集、103-113頁
- Beeman, W. O. (1986) *Language Status and Power in Iran*. Bloomington: Indiana University Press.
- Fan, S. K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13-3, pp. 237-252.
- Fairbrother, L. (2009) Native speakers application of contact norms in intercultural contact situations with English-speaking, Chinese-speaking and Portuguese-speaking non-native speakers of Japanese. In Nekvapil, J. & T. Sherman (eds.), *Language management in contact situation: Perspectives from three continents* (pp. 123-150). Frankfurt: Peter Lang.
- Hymes, D. (1972) Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, J. & D. Hymes (eds.), *Directions in Sociolinguistics* (pp. 35-71). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Neustupný, J. V. (1985a) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.), *Australia, meeting place of languages* (pp. 161-170), Pacific Linguistics.
- Neustupný, J. V. (1985b) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (ed.), *Cross-cultural encounters: Communication and miscommunication* (pp. 44-84), Melbourne: River Seine.
- Neustupný, J. V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. & Kwan-Terry, J. (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution* (pp. 50-69). Singapore: Academic Press.
- Malinowski, B. (1922) *Argonauts of the western pacific*. New York: Dutton.

日本語接触場面におけるペルシア語話者の儀礼的な言語行動の管理

- Radcliffe-Brown, A. R. (1922) *The Andaman Islanders*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, pp. 696–735.
- Sahragard, R. (2003) A cultural Script Analysis of Politeness feature in Persian in Persian Paper presented at the 8<sup>th</sup> Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, Japan.
- Tambiah, S. (1985) *Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective*. Cambridge: Harvard University Press.